

『僕はビートルズ』だから描けた ザ・ビートルズ

かわぐちかいじ

(漫画家)

21世紀の若者が1961年にタイムスリップし、
ビートルズよりも早くビートルズの曲を世に送り出してしまったら……？
そんな藤井哲夫の原作を、『沈黙の艦隊』や『ジパング』など骨太な大作で知られる
かわぐちかいじが漫画化した『僕はビートルズ』。
劇中で絶えず問いかけられた「オリジナリティとは何か」の先にあるものとは？

『僕はビートルズ』は、私も審査員を務めていた新人賞「MANGA OPEN」(一九九七年から二〇一四年まで「モーニング」と「モーニング・ツー」で行われていた漫画新人賞)の、第二回の応募作だったのです。「MANGA OPEN」は漫画原稿や原作だけでなく、原案だけ、イラストやフィギュアだけでも応募できる何でもありの新人賞で、藤井哲夫さんの応募作は、原作として初めての大賞受賞作となりました。ビートルズを扱った作品も初めてでした。私自身、中学生のころからずっとビートルズが好きだったので、それだけで目を惹きましたが、二世紀の日本で「ファブ・フォー」というビートルズのコピーバンドを組む若者たちが、ビートルズ誕生以前にタイムスリップするというアイデアが秀逸で、夢中になって読みました。私も、二世紀の海上自衛隊のイージス艦がミッドウェー海戦直前の太平洋上にタイムスリップするという設定の『ジパング』の連載が終盤にさしかかりつつあり、二重の意味で自分に浅からぬ縁があるなと感じました。私個人が選べる「かわぐちかいじ賞」にもこの原作作品を選びましたし、他の審査員の方々の評価も高く、見事大賞受賞となり、その特典として漫画化されることになったのです。

架空のキャラクターを通じて ビートルズを描く試み

当然、これはなんとしても私自身で漫画にしたいと思いました。ただ、『ジパング』の連載があり、同時に進めることはできません。『ジパング』を休載して『僕はビートルズ』を始めようかと「モーニング」編集部に話すと、「とんでもない」と言われました(笑)。それでも、もう漫画化のイメージがどんどん湧いてしまって、収拾がつかない。やむにやまれず、「私以外では漫画化しない」という約束を編集部に取り付けて、藤井さんには半年ほど待ってもらい、『ジパング』を描き上げることに専念しました。

それまで「ビートルズを漫画にできる」という可能性すら、考えたことはありませんでした。言うまでもなく、ビートルズの肖像権や楽曲の著作権は厳重に管理されています。私も遊びでジョンやポールが演奏している様子を描いたりしたことはありませんが、公表したことはありません。ところが、この原作の設定であれば、ビートルズを登場させることなく、ビートルズが世に現れたその衝撃を描くことができます。こんなやり方があったのかと、その点でも驚かされました。

ただし、作中で歌詞を使うとなると、おそろ

くは高額著作権料が発生してしまいますし、申請から許諾まで時間もかかるので、最悪の場合数年単位で連載を開始できないことも考えられました。となると、歌詞を使わなくても、読者の耳に「歌」が聴こえるような工夫をしなければなりません。その点でビートルズは、他の歌手やロックバンドとは違います。なぜなら、タイトルだけで多くの人が曲を思い浮かべることができるからです。たとえば、私はローリング・ストーンズも大好きですが、熱心なファンならいざ知らず、タイトルだけでメロディを思い浮かべることができる曲は、多くても数曲でしょう。『僕はビートルズ』では、タイトルと絵だけでもほとんどの読者はメロディを思い浮かべてくれたようで、改めてビートルズのすごさを感じた気がします。

カットから

メロディが聴こえてくる

写真や映像も含めた資料の多さも、ビートルズは群を抜いています。自分自身の記憶もありファッションなどの時代考証には苦勞しませんでした。だからこそ、より細かいディテールを

追求することもできたのです。

また、取材してみると、日本各地にビートルズのコピーバンドがこんなにいるのかと驚かされました。しかもみんな、それぞれのキャラクターになりきっていて、演奏技術はもちろんのこと、ブレス(息継ぎ)のタイミングや曲間のMC、ちよつとした仕草までそっくりなのです。互いに「最高のジョン」「最高のポール」と認め合った人たちが、長い年月をかけてビートルズに迫っていく——漫画化にあたり、コピーを通してビートルズを描くことではなく、純粹にファンだった人たちが自らビートルズになっていく過程にも、強い関心をもちました。

劇中のファブ・フォーの場合、センスと野心に溢れたマコトがポール、コピーとオリジナリティの間で相克するレイがジョン、弟分の立場でメンバーの機微を観察するショウがジョージ、無口で面倒見のいいコンタがリンゴという役回りですが、それぞれが憧れる本物に似せつつ、でもちよつとずつ違う、そのようなキャラクター造形になっています。私自身がビートルズのファンですから、四人の一番良い部分を表現したいし、読者に伝えたい。同時に、完全には同一化しないそれぞれの人間像も描きたいと思いました。バンドが売れて、取り巻く状況がどんどん変わっていくにつれ彼らも変わっていくわけ



『僕はビートルズ』コミックス10巻より。〈フリーズ・ブリーズ・ミー〉を演奏するファブ・フォー。画面構成で読者に楽曲を想起させる。©かわぐちかいじ/講談社

ですが、最初の人物造形をしっかりとっておけばおほくほど変化も鮮やかになり、港町の若者たちが世界的なスターになっていく過程で体験したことにも迫れるだろうと考えたのです。架空のキャラクターを通じて、できることならビートルズの内面をも描きたいという狙いがありました。

カットを描くうえで最もこだわったのは楽器です。名古